

遷延性意識障害患者への音楽刺激評価 —唾液アミラーゼを測定して—

〇三浦 恵子¹、大友 昭子¹、早川 洋子¹、川熊 のぶい¹、長嶺 義秀²、藤原 悟³

¹広南病院 東北療護センター看護部、²広南病院東北療護センター診療部、³広南病院 脳神経外科

【はじめに】私達は、自動車事故による遷延性意識障害患者に対して五感刺激を行い、音楽刺激としてピアノ演奏を取り入れているが対象者のサインを捉えるのは難しい。そこで外的刺激をストレスととらえ分泌するとされる唾液アミラーゼを測定し聴覚による刺激を評価したので報告する。

【方法】対象者は聴覚機能が確認されている患者12名(年齢29～85歳、平均54歳、男性10名、女性2名)、広南スコア9～68点、平均58点。酵素分解装置唾液アミラーゼモニターを用い唾液アミラーゼを測定し以下の状態で比較した。(1)聴覚刺激の少ない安静臥床状態 (2)受傷前好んで聴いていた音楽CDを聴いている状態 (3)ピアノ演奏を聴いている状態

【結果】(1)の状態の値と刺激(2)と(3)のどちらか値の高い方の値を比較すると、12名中12名が音楽刺激で高値を示した。安静時、音楽CD、ピアノ演奏で比較してみると高値を示したのはピアノ演奏が12名中7名で、音楽CDが5名、安静時の該当者はいなかった。

【考察】12名中11名は広南スコア50～60点台の中等症～最重症で、重症の遷延性意識障害であっても聴覚への音楽刺激が有効であったと考える。また、ピアノ演奏に対する反応が多く音の振動を身体で感じることができる音楽刺激は、聴覚刺激だけでなく日々行っている五感刺激の一旦を担っていると評価できる。今後とも、五感刺激を通して意識や脳機能改善、残存機能維持につながる看護を展開したい。